
リリカルなのは 0 0 StrikerS

過ちは繰り返させない！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〇〇Strikers

【NZコード】

N6645Y

【作者名】

過ちは繰り返させない！

【あらすじ】

爆発で起こった次元断層に刹那とフェルトは吸い込まれる。果たして刹那とフェルトの運命は！？ガンダム〇〇なのはStrikersのクロスです。

プロローグ

刹那とリボンズ、二人のイノベイターの戦いが終わろうとしていた刹那の愛機のリペア機『ガンダムエクシアリペア?』は一時的にブーストモードを可能としている

それに武装はGNソード改、GNビームサーベルがある
そして0ガンダムは、特に変わった武装はなかつた

2機は、構えた

0ガンダムは、盾を捨てて、背中からGN粒子を最大に放出し、両手でビームサーベルを構える

エクシアは右手の実体剣を0ガンダムに向けて、背中からGN粒子が何重にもなつて吹き荒れる

そして2機は、最大のスピードで走った

そしてエクシアのコックピット付近にビームサーベルが突き刺さり、0ガンダムにはGNドライブごと貫いた実体剣が刺さつていた
2機は沈黙したあと、爆発を起こしたが、それがきっかけで、次元に穴があいてしまった

刹那は、気絶した状態で、エクシアと共に穴に吸い込まれていった

フェルトたちはヴェーダから貰つた情報で刹那の位置を特定したが、

「エクシアの反応、あつません」

そのポイントにエクシアはいなかつた
フェルトの目元には涙が浮かんでいた

「まだあきらめないで！フェルト、小型艇でエクシアの捜索を！」

「了解…！」

そしてフェルトはブリッジを出ていった

小型艇に乗り込み、フェルトはヴェーダがくれた情報にあつたポイントに向かっていた

フェルトの中には期待と不安が入り混じっていた

（刹那、無事だよね？）

そんなことを思いながらフェルトはポイントに向かう
そしてそのポイントに着くと、おかしなものを見つける
それは、断層のようなものだった

「何あれ？」

フェルトは小型艇を近くまで向かわせる
すると、

「えっ！？」

小型艇が操縦不能になり、断層に向かっていく
そしてフェルトは断層に吸い込まれていった

episode 1

「うへ、じこは？」

刹那は目を覚ますと、そこは地上のどこかの森の中だった
辺りを見渡すもエクシアもない
それに服もソレスタルビーイングの制服になっていた

「一体何が起きたんだ？」

刹那は立ち上がるうとした瞬間、手に違和感があった
それは、刹那の手を誰かが握っていたのだ

刹那はその者の名を口にした

「フェルト…」

刹那の右横でフェルトが眠っていたのだ
フェルトもソレスタルビーイングの制服を着ていた
そしてフェルトが目を覚ます

「あれ？…刹那？」

そしてフェルトの目元に涙が浮かび上がる

「刹那！」

フェルトが刹那に抱きついてきた

刹那は一瞬戸惑った

だが、すぐに落ち着いてフェルトの頭を撫でる

「心配をかけたな…」

「ううん。 刹那が無事でよかつた」

フェルトは笑顔を見せる

刹那は口元を一瞬緩め、すぐにいつもの表情になる

「しかし、ここは一体？」

「私はエクシアを探していたときに、空間に穴があいていたからそれを調べようと思ったら、その穴に吸い込まれて…」

「…そ…うか…」

刹那は表情を暗ぐする

「でも刹那が無事でよかつた」

フェルトは純粋に嬉しそうだった

「マスター」

刹那とフェルトは驚いた表情を浮かべた

そして刹那は声がしたポケットの中に手を入れる
ポケットの中には青い宝石が入っていた

「お前は？」

「私です。エクシアです」

「つーエクシア！？」

刹那とフェルトはなぜエクシアがこの姿になってしまったか
不思議に思つたが、今は現状を確認する方が先だと思つた

「エクシア、俺たちはどうなったんだ？」

「マスターたちは、私とのガンダムの爆発で起きてしまった次元断層に飲み込まれ、こちらに来てしまったようですね」

「次元断層ってあの空間に穴が空いてた……」

「フールトの言うとおりです。あの時マスターは氣絶していたので氣づきませんでしたが、フェルトはそれを見ていたのです。そして」「この世界はマスターたちがいた世界ではありません」

「……どうことだ？」

「次元断層で異世界に来てしまったようです。私も氣がついたらこの姿に……」

「やうが」

「やしてこの世界はミッドチルダといつ魔法の世界です」

「魔法？」

「一人が知つてゐるような絵本に載つてゐるような魔法ではなく、体の中にあるリンクー【ア】といつものがある」とと、デバイスとい

う機械を駆使して魔法を使つようです。お一人のなかにもリンクアコアはあります

「私にも？」

「はい。フェルトはそれほどではありませんが、マスターの魔力値はSS+です」

「…」

刹那とフェルトは驚いたが、それはエクシアの言葉によりすぐに水に流される

「マスター！」ついに接近していく正体不明の機体を30機確認！

「えつ！？」

フェルトは少し怖がつていた

仕方がない

フェルトは普段、トレーニーでオペレーターをする

直接戦闘には出ないのだ

「心配するなフェル

フェルトは刹那を見る

「フェルトは俺が守つてやる。」

「つー

刹那は言う

仲間を死なせはしない！

そして突如一人にエクシアが言つていた機影が到着しようがあり、二人に攻撃をしてきた

「ちつ！」

「えつ！？キヤツ！」

刹那はフェルトを抱きかかえて走る

フェルトは少し顔を赤くする

刹那はフェルトをお姫様抱っこしている
女性だつたら赤面してもおかしくはない

「マスター戦いましょうー私の名前を言つたあとセットアップと言つてください！」

「了解！エクシア、セットアップ！」

そして刹那の体が光り始めた

フェルトは眩しくて目を閉じる

そしてフェルトは体に違和感があることに気がつく
体にゴツゴツしたものがくつついていた

目を開けると、そこにはエクシアとなつた刹那がいた
刹那はフェルトを下ろすと、敵に体を向ける

「隠れていろフェルト」

「う、うん」

刹那は右手の実体剣を展開した

「エクシア、刹那！セイエイ、目標を駆逐する！」

刹那は背中からGN粒子を吹かせて敵に突撃していく
フェルトは刹那を心配そうに見ていた

私はガジェットが出現したポイントに親友のフェイトちゃんと一緒に
に向かっていた

「最近、ガジェットの出現率高くない？」

「そうだね……あと、ここに来る途中でガジェットともう一つ魔力反
応がなかつた？」

「なのはも？」

「うやうやしくFヒートちゃんも感じたみたい

そして現場付近まで近づくと、そこでは、

「なのはーあれ…」

縁の粒子が空に向かつて溢れていた

最初は驚いたけど、すぐに別の感想が出てきた

「綺麗…」

「うん、 そうだね…」

そしてその粒子は消えた

私たちはガジェットを目視できる距離まで近づいた
だが、ガジェットの中に先程の粒子を放出しながら、ガジェットを
切り裂いていく

下にはガジェットの残骸が転がっていた

「す、」いーあのロボットが一体で?」

「とにかく行こうなのはー」

「うんー。」

刹那は30機いた機体をひと桁まで減らしていた

「遅い！」

1機を後ろから横なぎに切り裂いて、近くにいるもつ1機に向かって、要背部のビームダガーを投げる
ビームダガーは1機に突き刺さり爆散する
すかさず刹那はビームライフルを放つが、敵に当たる前にビームが
弾かれた

「なに！？」

「マスター、あれはAMFと呼ばれるものです

「AMF？」

「マスターが使用するライフルはビームではなく魔法です。あれは
魔法を防ぐバリアのようなものです」

「… そりか」

刹那はここまで接近戦で戦っていた

今ここでの出力でのライフルは無意味だということが分かった

「なら接近戦でいく！」

刹那は実体剣を展開して、敵に切りかかる

そしてラスト1機になる

刹那は最後の1機に突撃する

「これが、俺たちの、ガンダムだ！！」

最後の1機をまつぶたつにして、刹那は実体剣を折りたたむ
そして地上に降りて刹那はバリアジャケットを解除して、フェルト
のもとへ向かう

「刹那、ケガはない？」

「ああ。問題ない」

「そう…よかつた」

フェルトが安堵した表情を見せる

「マスター、先ほどとは比べ物にならない魔力を感知しました」

「なに!? どこだ?」

「こちらに近づいています。これは…人です」

人か…なら情報も手に入れられるかもしねれない

刹那はそう思った

「刹那、あれ…」

フェルトが上に指を向けると、そこには茶髪の髪で白い服に身を包

んだ女性と金髪の髪をして黒い服に身を包んだ女性が降りてきた

「時空管理局ですか？」

「時空管理局？」

刹那とフェルトが首をかしげていると頭に声が響いた

マスター、フェルト

（…なんだ、エクシアか？）

（頭に声が響く）

これは念話といつもので魔法の一種です。心で相手に話しかける
よつこすればできると思こます

いづか？

刹那の声が聞こえる

時空管理局とは私たちの世界にあつた連邦のよつなものです

（連邦と同じ…）

なら、そこも…

「あの～聞いてますか？」

茶髪の女性が無視していると思われたのか、少し怒ったよつな声で

話しかける

「すまない」

「一つ聞きたいのですが、これはあなたがやったなんですか？」

金髪の女性が指を指すと、その方向にはやつきの機体の残骸が転がっていた

「ああ」

「なら詳しい話を聞きたいので、ついてきてもうひとつよろしいですか？」

フェルトは刹那を見る

「私は刹那を信じて付いていく

「…」了解

「あつ、申し遅れましたが、私は時空管理局機動六課スター・ズ分隊隊長高町なのは一等空尉です」

「同じく機動六課ライトニング分隊隊長フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「フェルト・グレイスです！」

フェルトは礼儀正しく挨拶する

若干声が上ずっていたような気がした

「あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ」

これが刹那とフェルトの異世界での戦いの始まり

episode 1 (後書き)

駄文ですが、読んでくれたら嬉しいです
意見などもお願いします

episode 2

刹那たちはなのはたちに連れられ、今は機動六課隊舎隊長室にいる刹那とフェルト前には茶髪のショートカットの女性と銀髪の髪の小さい少女が浮かんでいた

「はじめまして、機動六課部隊長ハ神はやてです」

「ラインフォース？ ですぅ！」

二人が挨拶してきたため、刹那とフェルトも挨拶する

「フェルト・グレイスです」

「刹那・F・セイエイだ」

自己紹介を終え、本題に入る

「早速ですが、二人はなぜ森にいたんですか？」

「わからない。俺たちは気がついたらあそこにいた。だが、こいつのおかげでこの世界のことについてはだいたい理解した」

刹那はポケットから青い宝石を取り出す

「はじめまして、マスターのデバイスのエクシアです」

『ー喋つたー?』

「そんなんに珍しいんですか？」

フェルトが問う

「「」たなに高性能なデバイスは見たことがないよ」

なのはは驚いていた

「刹那さん、このデバイスをど「」で？」

これにはエクシアが答える

「私は「」の世界に来たときには「」の姿になつていきました。そしてマスターたちは地球から来ましたが、この世界の地球とは違つ地球、並行世界から来ました」

「並行世界と「」とは、一人は次元漂流者と「」とになるね」

「やうやく

「あの～次元漂流者つてなんですか？」

「何らかの拍子に他の次元世界に偶然漂流してしまった人たち、つまりは迷子のようなものですね」

「元の世界に帰る方法はないのか？」

「今のところはわかりません」

「やうやく…」

「みんな心配してるとだらうな…」

フェルトの頭の中に仲間たちの顔が浮かんでいく

「それで一人は今は泊まるとこはないといつ」とですね？」

「ああ」

刹那一人ならなんとかなるが、フェルトは…

「なら、機動六課で民間協力者として働いてみませんか？」

「どうしてですか？」

「ミッドチルダでは、無断でデバイスを持することは禁止なんですよ。民間協力者ならそういうことを未然に防げるし、それに時空管理局は正直言つて人員不足なんですよ。だから力を貸して欲しいんですよ」

「…わかった。ただしデバイスに関してはここ以外での情報開示は遠慮してくれないか？」

「わかりました」

「これで刹那とフェルトの機動六課での戦いが決まった

「これからよろしく頼む。あと敬語は必要ない。慣れてないからな」

「うん。一人ともええな？」

「うん。これからよろしくね！刹那君！フェルトちゃん！エクシア
も！」

「よろしくね。刹那、フェルト、エクシア」

「よろしくお願いします！」

フェルトは少々固かつた

「ハハッ、フェルトちゃん、敬語はいらないよ？」

フェルトは仲間の前でしか普通にしゃべらない

「はい」

「リイン、二人を隊舎の中の案内お願ひな」

「はい！はやてちゃん！行きましょう刹那さん、フェルトさん！」

「ああ。頼む」

「お願ひします」

そして三人は部屋を出でいった

刹那の強さに三人は驚いていた

「それにしてもここに男の人来るのも久しぶりやな」

「そうだね。六課はほとんどが女性だからね」

「それにしても一人とも、森のガジェットはどうなつてたん?」

「全部破壊されてたよ」

「どうゆうひ」とや?

「刹那君が全部破壊したと思つ」

「ほんまかい!?

「うん。それにまだまだ余裕みたいだつたよ?」

「とんでもないな、刹那君は…」

「それにしても刹那君でかつ」
「ええな～」

「これを刹那が聞いたり見つかるのだから…」

「ああ、なのはなちゃんにはゴーー君があるからな～」

「はやいはー、ヤー、ヤーしながらなのはを見る

「えつ？ ゴーー君はただの友達だよ？」

はやいとフロイトはその場ですつゝける
そして畠山もしてこない無限書庫の司書長の恋は幕を閉じた

「フロイトやんば？」

なのははフロイトに話を振る

「私もやつ思つたが、それ以上に刹那の皿には決意とか悲しみとか
があつた気がする」

「どうしてやつ思つたの？」

「刹那の皿を見ると、何か私と似たような皿をしていたから… 過去
に何かあつた思つただ」

「でも」れは刹那君の口から聞くしかなによね

「やうやな。それに過去はどうあれ、明日から仲間なんやー・みんな
で何があればフォローしたるつー？」

「うん！」

「そうだね」

そして刹那に頼もしい仲間が出来た
フラグ予備軍もね…

機動六課の中を案内された二人は、リインに連れていってもらった
自分たちが使用する部屋にいた

「どうしたらいい？」

部屋には最低限の物資は置いてあった
だが、問題はベッドが一つしかないということだ

「フェルト、俺はソファーで寝る」

そう言って刹那はソファーの上で横になる

疲れが刹那の体を蝕んでいた

刹那が眠りに就こうとしたその時、フェルトが刹那の腕を引っ張った

「どうした？」

刹那が見ると、フェルトの顔は少し赤かった
少しもじもじしているし…

「刹那、一緒に寝ない？」

「…ハツ？」

そう言つとフェルトの顔がさらに赤くなつた

「刹那は戦つた後なんだからちゃんと休まなくちゃ…」

さらに赤くなつている

これではフェルトが爆発するのではないかと思つた刹那はため息を
つきながら答える

「…わかつた」

フェルトの顔が明るくなつた

（マスターも罪な男ですね）

エクシアはそう思つた

そして一人は結局一人で寝ることになつた

episode 2 (後書き)

今回は短めです

意見などあつたらよろしく！

なにかリクエストもあればおねがいします！頑張ってみるんで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645y/>

リリカルなのは 00 StrikerS

2011年11月26日19時57分発行